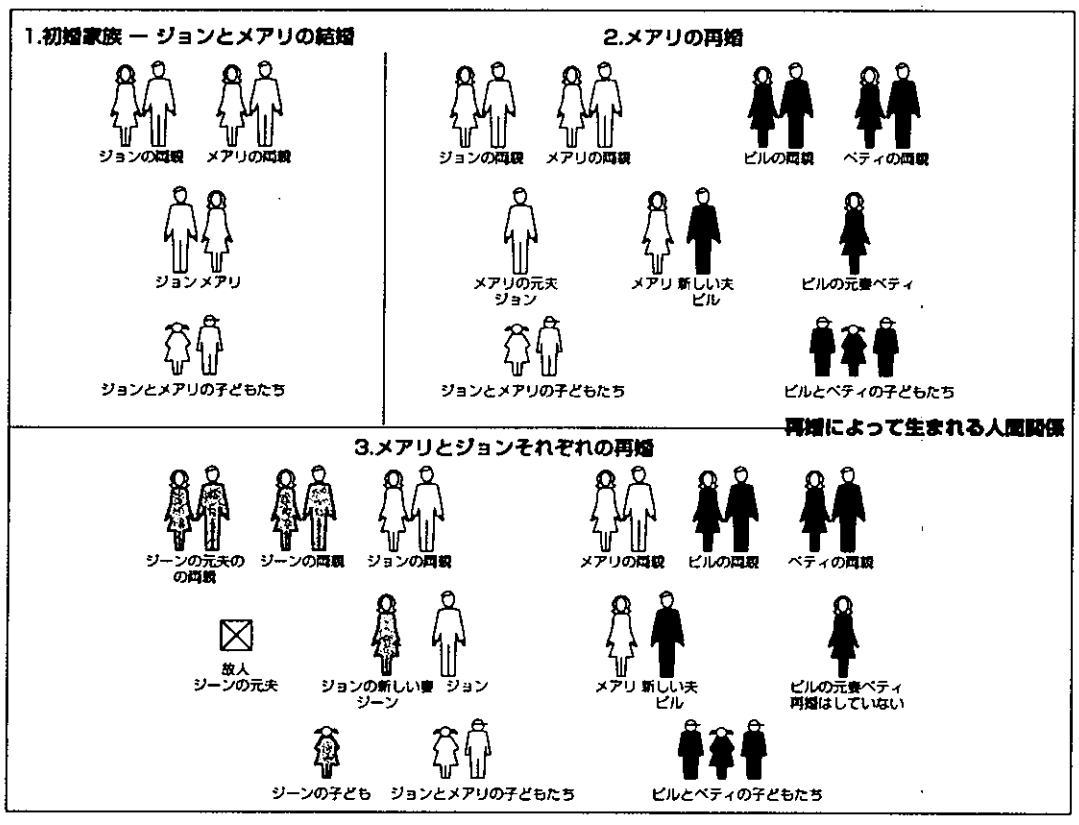
図 A　「LEAVES ペアレンツ PROGRAM TEXT」16 ページより　ワークの例

ワーク（1）

下の図を見てみましょう。初婚家族にくらべ子連れ再婚家族にはより多くの人々が関わっていることがわかります。



家族の状態を把握するひとつの方法として、「ジェノグラム」という図を描く方法があります。ステップファミリーの夫婦は、自分の家族のジェノグラムを作ってみることで、自分たちのステップファミリーを取り巻く家族関係を見つめ直すことができるのです。

下の図を参考に、実際にジェノグラムを作り、分かち合いましょう。

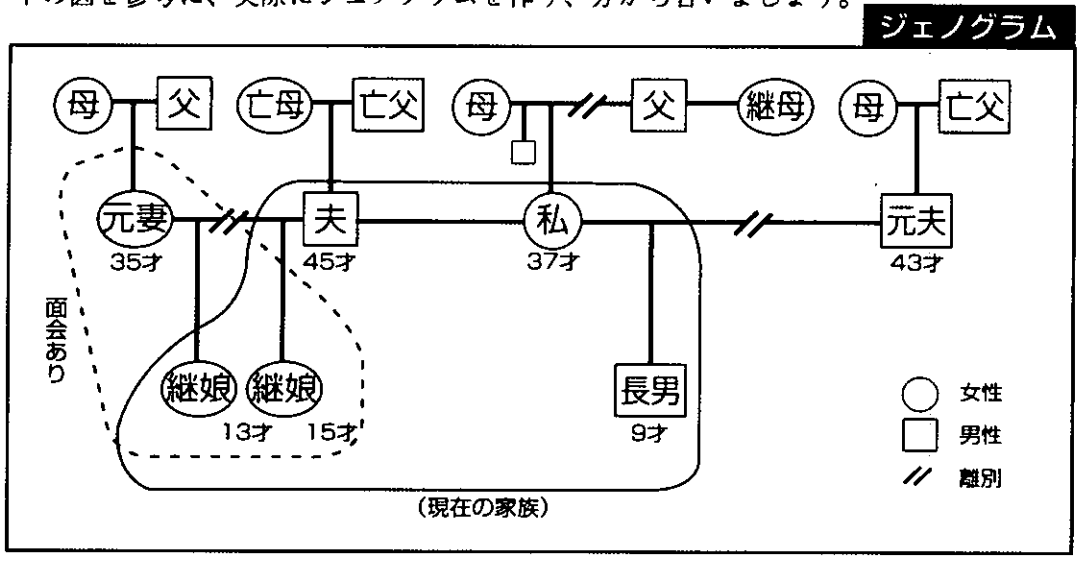
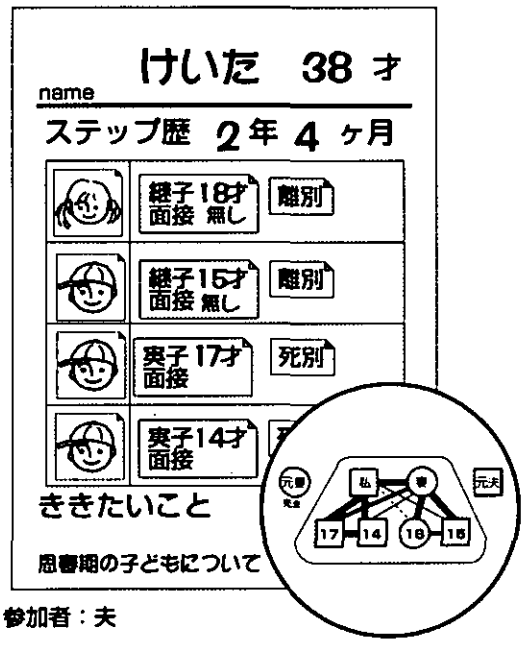


図 B「LEAVES ペアレンツ PROGRAM TEXT」5 ページ より家族カードの書き方

家族カードのサンプル

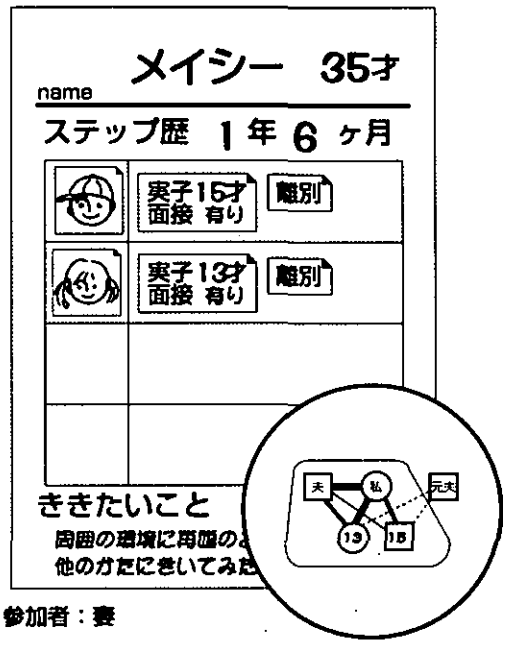
複雑な家族構成も一目瞭然の家族カードです

SAMPLE 1



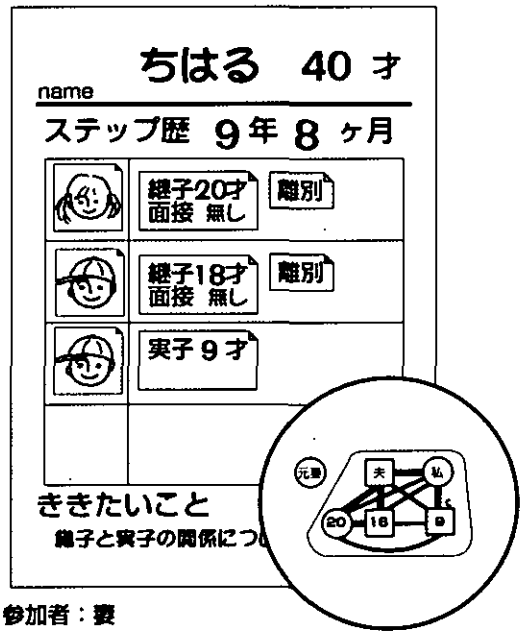
参加者：夫

SAMPLE 2



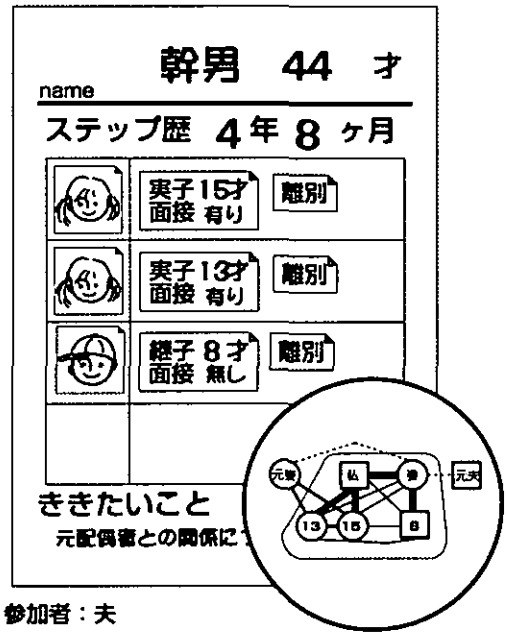
参加者：妻

SAMPLE 3



参加者：妻

SAMPLE 4



参加者：夫

2．継母支援教育プログラム（LEAVES ステップマム）について

（1）プログラムの開発の目的と経緯

ステップマザーは、ステップファミリーの他のどの立場よりも、ストレス度が高いといわれている。ステップマザーとして直面する悩みはどれもその体験がなければ解らないものだ。

愛する人の大切な子どもだから、私がよい母親役になろう、誰もがそういう気持ちでステップマザーになる。しかし愛する人の子どもといっても、精神的な絆は皆無の状態。その上、その子の母親は現実に、もしくは記憶の中に明らかに存在する。

子どもの母親は、愛するパートナーの前の配偶者。その子には、実母の面影もあるだろう。継母は実の母親に取って代わることはできないという現実に直面する。

また子どもは、最初の両親の家庭、そして父親との家庭（父子家庭の場合、子育てには、第三者、例えば祖母や親戚が関与していることも多い）と大きな家族の変化を体験しており、既に様々な生活習慣が身に付いている。自分のルールには、簡単には従ってくれないかもしれない。成長過程では、子どもは正常な発達段階として反抗もするだろう。親の立場なのだから、叱らなければいけない場面も日常的に訪れる。

しかし、これまでステップマザー向けの支援は、日本には殆ど存在しなかった。そこで、SAJ 現代表の笠井は 2000 年 9 月、再婚半年後に、単身、コロラドで行なわれたステップマザーのためのリトリートに参加した。そこに集まったのは子育てを終えた大先輩のステップマザーでありセラピストであるスー・パットンと 14 人の現役ステップマザー達。そこで、初めて自分の本当の気持ちを遠慮なく分かち合うことができた。ひとりで抱え込んでいた、様々な感情を解放でき、たくさんの仲間に勇気をもらって、あらためてステップマザーとしてやっていく覚悟ができたような気がした。帰国後、このようなネットワークを日本に作ろうと SAJ 設立を誓って帰国した。ステップマザー向けのプログラムは、SAJ を設立してからすぐにでも行ないたいくらい自分自身のニーズも高かったのだが、まずは、会の土台作り、SAA 会長の招聘イベント、翌年は LEAVES ペアレンツと、一年ごとにステップを踏んで、やっと“LEAVES ステップマム”開催に至った。

20 数年のステップファミリー支援活動実績を持つ SAA で実施されているステップマザー向けサポートプログラムは、SAA 理事でもある心理学者マリオンサマー氏が開発した“I Didn’t Grow Up to be a Wicked Stepmother”という名のプログラムであり、対面を基本とするセルフヘルプグループ活動用のプログラム（13 回連続コース）である。しかし、日本で対面型のサポート（週 1 回 1 ヵ所に集まることを 13 回連続する）を行なうことは、これまで SAJ として 3 ヶ月に 1 度、関東、関西、九州、東北、山陰の 5 ヵ所で対面型のサポートプログラム LEAVES を実施してきた経験から不可能であるように思われた。そのため、時間や居住地域という物理的制約をクリアし、全国に点在するステップマザーがプログラムの効果を最大限に得ることのできる通信講座として編集することとした。参加募集は朝日新聞、毎日新聞などを通じて広く行ない、インターネット、E メール、ファックス、郵便などの通信手段を利用して、プログラム実施を実現した。

また、今後もサポート・ニーズを持つ当事者が、ステップマザーであることを様々な角度から見つめ直し、多くの当事者の生の声を参考にできるように、今回のプログラムで毎回配布したワークシートをワークブックに、受講者の回答を編集したものをアンサーブッ

クとして編集し、出版することとし、ワークブック、アンサーブックには、ひとりでも多くの人がステップマザーとしての誇りを感じることができるよう、We are proud of being THE STEPMOTHERS !というサブタイトルをつけた。 (笠井裕子)

（2）実施の経過と結果

①プログラム開発

マリオンサマー氏による“I Didn't Grow Up to be a Wicked Stepmother”は、ステップマザーが陥ってしまうネガティブな心理状態から解き放たれるために必要な情報や知識を継続的に提供し、当事者同士で学べる内容である。13回連続講座用に構成されている８章立てのプログラムを、日本のステップファミリーにとって適切なトピックになること、当事者にとって拒絶感が生じることのないよう、理解しやすく共通した認識がもてる連れ子、実子といった使用言葉の統一に留意し、また設問の省略や、順番を変える際には、Visherによるステップファミリーチェックリストを基軸として、まず７回講座分に編集した。

＜オリジナルプログラム目次＞	⇒	＜モニター用プログラム目次＞
１章　あなたはひとりではありません		１章　ステップマザーの役割
２章　ステップマザーの役割		２章　自分の過去の経験が与える影響
３章　自分の過去の経験が与える影響		３章　パートナー関係のコミュニケーション
４章　結婚生活にて愛情は最優先事項		４章　パートナーとの関係を尊重すること
５章　パートナーとの関係の尊重		５章　ステップの子どもが直面する困難さ
６章　ステップの子どもが直面する問題		６章　意地悪な前妻
７章　意地悪な前妻		７章　学校の宿題
８章　行動に移す		

次に、７回講座用プログラムを、SAJの運営委員も含め10人のステップマザーに３ヶ月間配信し、各章のわかりにくい設問や表現をモニターしてもらった後、プログラム監修、実践におけるスーパービジョンを村本邦子氏、茨木尚子氏より受け、修正を行なった。各章に副題をつけ、モニター後の改訂は以下の通りである。

１章　あなたはひとりではありません
　　＜参加者の基礎的アンケート＞
２章　ステップマザーになるということ
　　＜ステップマザーの役割について＞
３章　パートナーとのコミュニケーション
　　＜夫との関係について＞
４章　ステップの子どもが直面する問題
　　＜感情の欲求について考える＞
５章　実母（パートナーの前妻）について
　　＜ステップファミリーに与える実母の影響＞
６章　ステップファミリーをとりまく社会

<暮らしやすい社会にするために>
7章 We are proud of being THE STEPMOTHERS !
<まとめ>

・1章について

モニター版にはオリジナル版1章の「あなたはひとりではありません」を「ステップマザーの役割」に組み込んだのであるが、「ひとりではない」という言葉に対するモニターからの反響が大きかったため、このタイトルを再度1章に使用することにした。また、当初はアンケートのような形で別途実施するつもりであった参加者のフェイスシートを、他にどんなステップマザーがこのプログラムに参加しているのかを参加者同士知ることを通して、「ひとりではない」ことを実感できるよう1章で集成することにした。

・2章について

モニター版2章では、自分の過去の体験と現在のステップファミリー生活とを関連づけて考える「両親との未解決の問題が、妻として、そしてステップマザーとしてのあなたにどのような影響を与えているか」「過去の人間関係がどのくらい影響を及ぼしているか」といった設問が続き、これらの多くは何を聞かれているのか漠然としてわかりにくい、書きにくいといったモニターの声が多かったため、いくつかの設問を他章（子どもに関する章、パートナーに関する章、前妻に関する章など）に分散させ、ステップマザーの役割についての設問を「ステップマザーの心得10か条」とともに2章とした。

・3章について

オリジナル、モニター版ともに2章にわたっていたパートナーとのコミュニケーションを一章にまとめ、この章ではステップファミリーに限らず米国で馴染みのある「プレマリタルカウンセリング」的指向を持って編集した。家事の分担や財産などについて話し合いを持っているかどうかについて一つ一つ答える設問が約20問あったが、それらの内容を一般講座にて公表するにはあまりにもプライバシーに関わることが含まれていることと、夫婦間でお互いに納得できているかを確認することにこの問いの目的があると理解したため、回答方法を記述式ではなく、「よく話す（話した）・お互い納得済み、時々話す・お互い納得済み、よく話す（話した）が問題あり、話したことがない、話すつもりはない、その他」の6パターンの選択式にと変更した。

この章にはもう一つ種類の違うワークがあり、それはパートナーへの思いを、空欄を埋めて作る文章で表すものであったが、それらには時間がかかった、難しかったというモニターが多かった。しかし、非常に心のこもった回答ばかりが提出されたため、大変だから省くと判断すべきではないとスタッフ内での一致があったため、それらの設問を上手に生かす方法を検討し、分量と言葉とを変更して残すことにした。

・4章について

ステップマザーたる所以は継子の存在が不可欠であるため、ステップファミリーに育つ子どもとの関係に言及する章は必然であったが、モニター版では第5回配信内容であったこの章の回答を終えた後の感想に、「書くのが辛かった」「混乱した日々、怒りを思い出した」などの感情を表す言葉が初めて多く記されていた。そのステップマザーひとりひとりの気持ちを真摯に受け止め、再度設問を吟味し、オリジナル版では設問の多くが継子と

の関係に関するものだったため、ステップマザーの連れ子（実子）やセメントベビー（現夫婦の間の実子）との関係も含めた設問に、LEAVES ペアレンツで使用されるプログラム・テキスト第３章「夫婦の絆と子どもの気持ち」を参考に再編集した。

・５章について

「意地悪な前妻」というオリジナル、モニター版ともにつけられていたタイトルはあまりにもネガティブすぎるという判断のもと変更した。また、夫の前婚が離別のステップマザーに偏った設問も多く見られたため、夫の前婚が死別のステップマザーのための設問を加えた。また、前妻への不満を日常生活の中でステップマザーが出すことはなかなか難しいだろうからこの場で多少発散することができればいいのではないかという意図を持ってモニター版を配信したが、実施してみるとそれらを書き連ねることのメリットが生じなかったため、削除した設問も多い。

・６章について

当初より SAJ 内において、子どもたちの学校で出される宿題や授業については、その中にステップファミリーにとって心を痛める内容のものがあること、それらが子どもに与える影響について懸念してきた事柄であった。SAJ として、実際の宿題や学校での出来事を集め、それらを公的機関にまた社会に提言していくことができれば幾分かはこれまでにあったような事態に変化があるのではないか、まだ子どもが小さいステップマザーも心構えができるのではないかと考え、ステップファミリーと彼らを取り巻く社会との関わりについての章を編集した。

・７章について

最終章は、これまでの６章を通して得てきたことを実生活に生かしていけるよう、オリジナル版８章の「行動に移す」を参考に６章全てをふまえた解説を加え編集した。このプログラムを始めた３ヶ月前の自分と今の自分とに違いが生じていること、その違いを感じられるよう意図して、幾人かのステップマザーがお守りのように感じたという「ステップマザーの心得 10 か条」を再度読み、その感想を記述するワークを加えた。　（桑田道子）

②コースの実施と結果

コース実施内容は、配返信される全７回のプログラムとコースの参加者のみがログインできるパスワード制のウェブサイトと感想等を書き込むことのできる掲示板、全国４ヵ所（埼玉、横浜、名古屋、大阪）で開催された交流会、そしてコース終了後、本コースをもとに編集出版されたワークブック、アンサーブックの配布である。

2003 年７月に本コースは 45 名の参加者でスタートされ、最終的には 57 名参加となった。プログラム内容については前述の通りであるが、

１．各章を解説と設問の２通に分け、決められた日に参加者へ配信

２．参加者はまず解説を読み、設問に回答し、その部分だけを５日以内に事務局へ返送

３．回答締切４日後に回答集が編集され、参加者に配信される

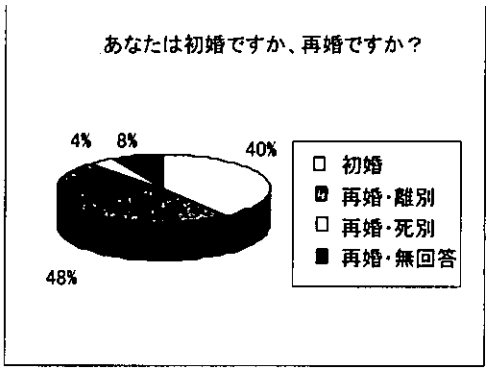
という手順で、E メール、郵送、FAX で参加できるよう整備した。回答集には、各設問に寄せられた回答をふまえたコメントがコーディネーターによってつけられている。配返信スケジュールは、解説と設問（ワークシート）は０のつく日（7/10・20・30　8/20・30　9/10・20）、ワークシート提出締切日は５のつく日（7/15・25　8/5・25　9/5・15・25）、回答

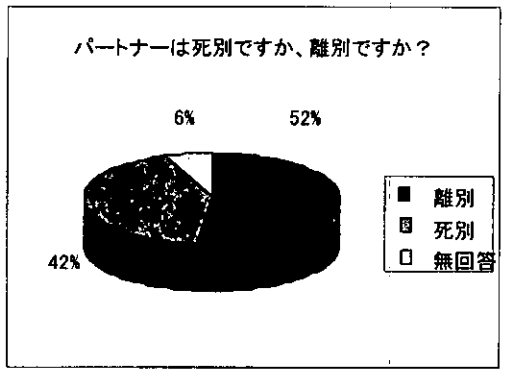
集（アンサーシート）は９のつく日（7/19・29　8/9・29　9/9・19・29）である。

また、ウェブサイトはステップマザーが安全に守られた場所で交流できるように参加者限定パスワード制とし、サイトでもワークシート、アンサーシートが確認できるようになっており、コースに並行してステップファミリー生活における悩みやワークを終えての感想などを参加者が自由に意見交換できる掲示板を設定し、問題解決について話し合ったり経験の分かち合いを行えるようにした。

以下は、コース終了後回答集より編集出版されたアンサーブックからの引用である。このアンサーブックはワークブックとともに、ステップマザーの現状とニーズを社会に伝えることを目的とし、全国の主要な女性センターや子ども家庭支援センターなどの諸専門機関にも配布した。

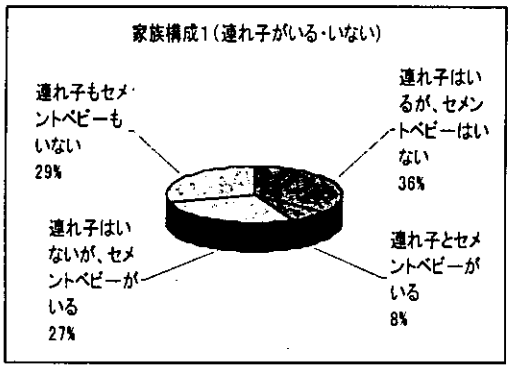
コース参加者の特徴

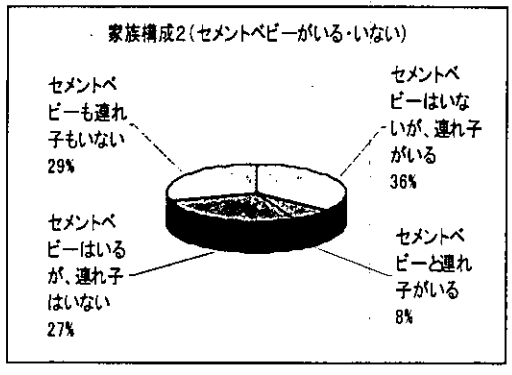


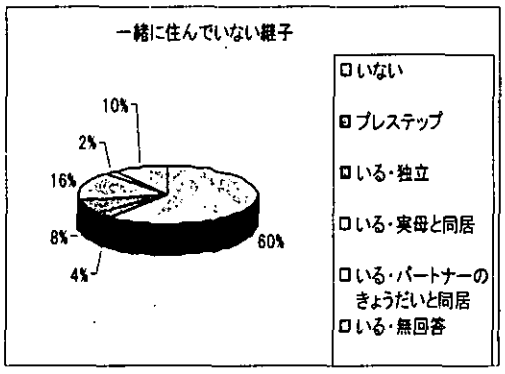


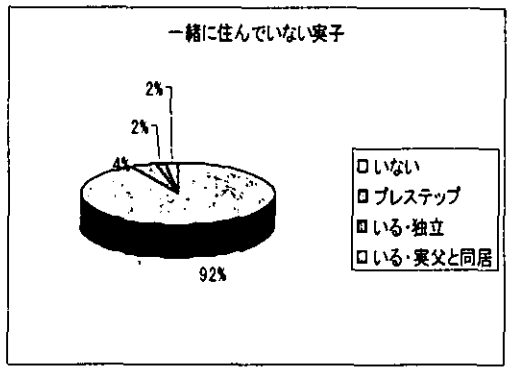
再婚に関して女性は離別が多く、男性は女性に比べて死別の方の割合が高い。パートナーとの結婚期間は平均４年７ヶ月、最長 16 年。交際期間の平均は１年３ヶ月。92%がパートナーと同居している。参加者の平均年齢は 34.4 歳、パートナーは 43.4 歳である。

子どもの数の平均は 2.9 人であるが、その内訳は以下の通りである。

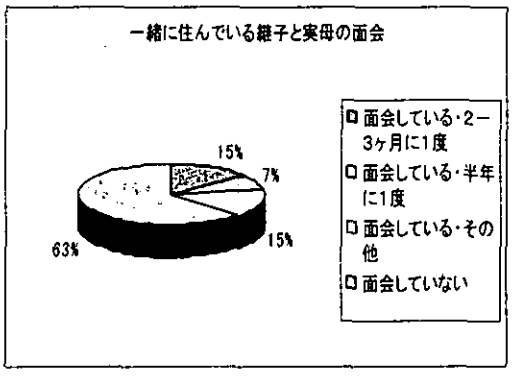


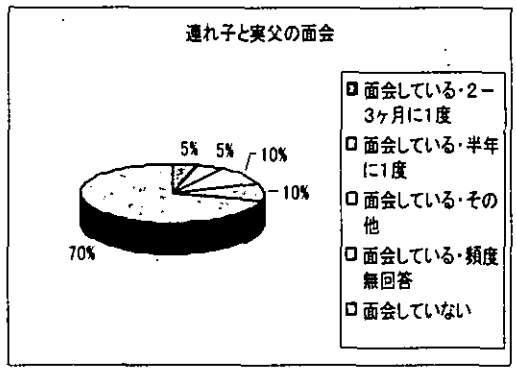






子どもと離れて暮らす実親との面会については、パートナーが離別である家族のうち、ステップマザーと一緒に住んでいる継子が実母と面会しているのは、37%。面会の頻度「その他」は月に平均２回である。ステップマザーの連れ子がいる家族のうち、連れ子と実父が面会しているのは、30%であった。面会の頻度「その他」は、「（子どもの）長期休暇ごと」の面会である。





コース参加者による受講後の感想

・結婚してステップマザーとなって毎日のように色々問題が起きた。他のステップマザーはどんなこと経験しているの？どんな思いを持っているの？とても知りたかった。プログラムに参加して、アンサーシートの返却がとても楽しみだった。私ひとりじゃないんだ、他にもこんなに仲間がいるんだ、皆いろんな思いを抱えているんだって励みになった。これからもステップマムの皆をLEAVES、SAJの皆を励みに参考にしていこうと思う。そして、夫とコミュニケーションをとってはいるが、もっと重要なことに関し、あまり話ができていないことに気付かされた。これからどんどん話をしていこうと思う。そして、夫婦で家庭を築いていこうと思う。

・時に心に痛い設問もあったけれど、冷静に正面から見据えることのなかった問題にも向き合えて、人間として成長できたような気がする。日常に埋没して見失っているパートナーのよさを思い出し、嫌なところばかりあげ連ねている日頃の自分を見出して、ハッとさせられました。パートナーにもこういうことをじっくり考えてほしいなあと思った。

・実は、参加する前は、どうしよう、結婚してすでに６年、今はそんなに深い悩みもないし、今さらこんなプログラムに参加したって、という気持ちがありました。でも、今で

は本当にこのプログラムに参加してよかったと思っています。アンケートに答えていく中で、自分がステップマザーとして漠然と考えていたことを、きちんと頭の中で整理できたし、また、あまり考えていなかったことに気付かされました。

・継母の「入口」にあたる講座だったように思います。誰にも相談したことがなく一人で悩んでいた人達に気持ちを整理するための良い機会になったのではないでしょうか。しかし、すでにステップを勉強している方々にとっては物足りないものだったと思います。今後、これを初級とするなら中級・上級などの講座も欲しいです。特に中級上級では継親としての対応もさることながら、いきなりその年代の子どもの親になってしまった継親にとってその年代への対応の仕方をトレーニングするプログラムだと思います。幼児から中高生まで対応はそれぞれ違い、どの年代が難しいなどの区別はつけられないと思います。親としてのトレーニングも上級プログラムでやって欲しいと思います。

・１６年６ヶ月間の道のりには様々ないいことも悪いこともありました。もう一度それらのことを振り返り、これからを考える良いチャンスを与えて頂きました。書くことをためらったり、本音が書けずたてまえを書いて自己嫌悪に陥ったり、反省したりしました。新聞の記事からSAJを知り、ステップマザーという同じ立場の人達と出会えることができたことに感謝します。堂々と「私はステップマザーです」と言える社会が早く来ることを願っています。

最終回に回収した感想からは概ね満足しているという結果が得られた。各家庭で起きている問題には、家族構成や再婚年数の長短に拘わらず普遍的な問題と、子どもの年齢や再婚までの過程によって変化して起きる問題とがあることが改めて明らかとなった。ステップファミリーの発達段階に即したものや、継父と実子との関係、パートナーである実父への気持ちの伝え方など、今後これらの要望にもこたえていけるプログラム作成を試みていきたいと考えている。（笠井裕子・桑田道子）

（３）今後の展望

通信講座はこのように終了したが、今回集められた貴重な回答をもとに出版されたワークブック、アンサーブックを活かし、ウェブサイトをリニューアルし、今後もステップマムプログラムはSAJの通常の事業として実施していく。次段階として、コース既参加者が中心となり、オンラインでつながりつつ居住する地域で他の当事者を募ってこのプログラムを対面の場で実践するネットワークが形成されるようなサポートを提供していくつもりである。各地に点在しているステップマザーにとって、サポート情報と仲間の存在は個々のステップファミリーで安定した家族関係が築かれていくことにつながるだろう。また、このようなサポート・ネットワークが根付いていくことにより、ステップファミリー当事者やそれ以外の人々に対して社会的に『ステップファミリー』の認識を高め、公的機関や専門家へ正しい理解や関心を喚起する影響力となる。ステップマザー及びステップファミリー支援策はそれらの機関の重要な情報源ともなると考えている。

（笠井裕子・桑田道子）

第８章　ステップファミリー研究における知見のまとめ

１．ステップファミリー当事者へのインタビュー調査

ステップファミリー当事者へのインタビュー調査からは、次のような知見を得た。

①継親子関係の形成が、当事者が当初予想した以上に難しいのは、（当事者がどう感じているかは別にして）単に血縁関係がないことによるわけではないだろう。生活経験の共有の少なさ、初婚夫婦とは異なり既存の親子関係の親密さと新たな夫婦関係の親密さが競合しやすいこと、子どもが介在する元配偶者との潜在的関係と新しい夫婦関係が競合しやすいこと、子どもを一時的に養育した祖父母（配偶者の親）と競合しやすいことなど、潜在的に多様な競合・対立関係のなかで新たな親子関係を築かなければならないというステップファミリーの独自性に由来する部分が大きい。

②ステップファミリーにおける夫婦関係（パートナー関係）形成の難しさは、上記の継親子関係構築の困難さと絡み合う。男女のどちらかあるいは両方に子どもがいる（ひとり親家庭である）ことは、ふたりが結婚に対して慎重になる要因であると同じくらいに結婚を急ぐ要因にもなる。子どもの「母親」「父親」になるには、少しでも子どもが幼い方がよい（もの心がつく前、小学校に上がる前、思春期を迎える前など）と考える傾向が広く認められるが、それゆえに出会いから結婚（同居生活）までの期間が極小化しやすい。パートナーとしての関係が深まる前、生活設計が固まる前に、結婚に踏み切る傾向がある。それゆえに、新たな家族生活において急激な家族文化摩擦を生じやすい。また、ステップファミリーへの移行は、稼得役割（就業）や家事・育児役割の分業のあり方、家計状況の面でも大きな変化をもたらす。既存の親子関係との競合関係のなかで、上記のような生活変化が多重的・集中的に生じることが多いため、新たな夫婦の関係を深めることは難しくなる。ときに継親は実親を子どもに甘い親とみなし、実親は継親を必要以上に子どもに厳しいとみる傾向も生じる。２組の親子間の対立・競争状況や親子関係と夫婦関係の二者択一的状況が生まれることさえある。

③現在のところ、数の少ないステップファミリーの親たちは、複雑な状況で難しい親役割を遂行する自分の心情を理解し、サポートしてくれる相手を日常生活に見いだすことは困難である。社会的に孤立しやすいことが、ステップファミリーの家族関係の難しさをさらに助長している。少数者であるため誤解や偏見の眼で見られたくないと（子どもが気にするのではないかと）思って、初婚家族で通して、ステップファミリーであることを対外的に隠すことが、ストレスの出口を閉ざすように見える例もある。親族や近隣との関係はサポートであるよりストレス源となることも多く、むしろ選択的に作る地縁・血縁を離れたネットワーク、とりわけインターネットなどを経由した同じような経験をした当事者同士の絆は、特別なサポート効果（ストレス軽減）をもたらす。

④大まかな傾向として、親の立場にあるステップファミリー当事者の中でも、初婚継母（あ

るいは再婚でも子育て経験のない継母）がもっとも大きなストレスを感じやすいように見える。継母は、結婚以前の楽観的な予想に反して、子どもの親になることの困難さをもっとも強く感じやすい。それは、周囲から母親として過大な期待をかけられると同時に、初婚継母が家族の中と外の両方においてもっとも孤立しやすい条件を備えているからかもしれない。それに対して、男性（実父・継父）は、子どもと深く関わる役割から距離を置くことが許されやすく、家族外の役割を通して孤立感を緩和し、深刻なストレスを直接抱えることは少ないのではないだろうか。

⑤ステップファミリーは、初婚家族に比べて、困難な条件が多いことを考えれば、短期間で夫婦関係・親子関係が育つと考えることは非現実的である。時間をかけて、柔軟な発想とコミュニケーション努力によって、新たな関係を少しずつ築く必要がある。既存の家族イメージや母親・父親イメージに囚われずに家族づくりを試みている事例のなかに、行き詰まった家族関係構造を前進させるヒントが隠されているように思える。

（野沢慎司）

2．ステップファミリーにかかわる専門機関・専門職調査

専門機関・専門職調査の結果からは以下の点が明らかとなった。

①既存の公的機関では、再婚家族を独自のニーズをもった家族形態とはとらえておらず、明確な支援方針をとっていない。経験年数が豊かな専門職は、自らの家族体験や、これまでの支援経験によって、独自の家族観、再婚家族への支援方針を持っているが、そのことが機関全体の支援方針として共有されていない。再婚家族への支援方針は、かなり個々の専門職によって異なっていることが明らかとなった。

②それぞれの相談機関によって、対応している再婚家族層に特徴がみられた。児童相談所では、虐待など深刻な問題を抱えた再婚家族にかかわっている。一方、家庭児童相談室では、より幅広い再婚家族からの相談を受けている実態がみられた。しかし、家庭児童相談室では、再婚家族に対しては、一般の子育ての悩みとして対応している場合が多い。自ら問題を認識し、当事者組織に支援を求めて接触してくる再婚家族ではなく、一方で虐待などの健在化した問題を持ち、専門相談機関につながっている再婚家族でない、大多数の再婚家族からの相談について、既存の専門機関では独自な問題を抱えた家族としての支援体制はできていない。今回の調査対象機関では、これらの家族層への支援機関のひとつとして、児童家庭相談室が重要と考えられるが、これに対応する相談員の再婚家族へのより深い理解と知識が必要と思われた。

③保育所の保育士は、子どもとのかかわりを中心に、家族形態の変化（離婚、ひとり親家庭、再婚）に身近なところでかかわっている。とくに長期で子どもの成長にかかわりながら、身近なところで新しい親子関係についてアドバイスができているケースもあった。

今後、さらに回答者を増やし、以上のような知見を検証することと、今回対象とならな

かった児童家庭支援センター、保健所などの専門職にもインタビューを実施し、全体的な支援体制のあり方をより深く検討する必要がある。

3．ステップファミリーのセルフヘルプ・プログラムの開発・実践研究

当事者活動研究の成果は以下のとおりであった。

①対面型再婚家族、親サポートグループ「LEAVES」は、関東、関西地区からスタートし、現在、東北、九州、山陰地区に活動拠点を拡大させた。また活動実績をとおして、新たに活動を始める当事者にとって有益な情報を伝える、動プログラムのテキストブックを作成した。このテキストブックは、今後必要な地域で、グループ活動をスタートさせる際に非常に大きなサポート情報となるであろう。

②オンライン上での継母教育プログラム「LEAVES ステップマム」については、地理上・プライバシー上の条件から地域内での対面型サポート活動がしにくい継母たちにとって、参加のしやすさという点で効果があった。また、毎回ワークシートを配信し、それぞれの回答をネット上で共有するというシステムなので、掲示板などにより必要な情報の相互交流が図られた。さらに毎回の回答をまとめた「アンサーブック」を作成したことにより、当事者の体験と情報の共有化をより一層深めることができた。

（茨木尚子）

目　次

Ⅰ．総合研究報告書
ひとり親（母子）家庭・再婚家庭の実態とその支援方法に関する研究
山　崎　美貴子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 439

平成15年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

総合研究報告書

ひとり親（母子）家庭・再婚家庭の実態とその支援方法に関する研究

主任研究者　山　崎　美貴子　神奈川県立保健福祉大学　教授

研究要旨

本研究は，①自立困難なひとり親家庭への支援のあり方研究，②再婚家族の実態とその支援のあり方研究という二つの分担研究を組織して実施した。両分担研究とも，実態を明らかにし，ひとり親家庭および再婚家庭の諸問題について，具体的な支援のあり方を示し，家庭支援の実践現場における援助者の資質向上に寄与することを目指した。

具体的には，ひとり親家庭への支援のあり方として，自立困難なひとり親家庭への「母子自立支援員マニュアル」の試案を提示した。また，再婚家族の支援のあり方として，対面交流が困難な継母向けにインターネットを用いた支援プログラムおよび継母サポートのための通信教育プログラムを開発した。

分担研究者氏名

北　川　清　一　明治学院大学教授

新　保　幸　男　神奈川県立保健福祉大学助教授

小　林　　理　東海大学助手

野　沢　慎　司　明治学院大学教授

茨　木　尚　子　明治学院大学助教授

笠　井　裕　子　ステップファミリー・アソシエーション・オブ・ジャパン代表

永　井　暁　子　財団法人家計経済研究所次席研究員

松　田　茂　樹　第一生命研究所ライフデザイン研究本部研究開発室副主任研究員

A．研究目的

近年，離婚，再婚というライフイベントが増加することにより，わが国では，ひとり親家庭，再婚家庭（ステップファミリー）の増加傾向が顕著になっている。ひとり親家庭では，親の心身の障害，ＤＶ体験等により，長期にわたり子育てを中心とする生活支援が必要となる家庭も少なくない。一方，一層の増加が予測される再婚家族については，わが国の場合，その実態や生活ニーズに関する研究が未開拓のままにあり，十分な社会的認知も得られていない段階にある。本研究は，ひとり親家庭の中でもとりわけ濃密な支援を必要とする「自立困難」事例に焦点をあて，その実態と要因分析から，彼らを支援するための具体的な援助方法について明らかにすることを目的とする。また，ひとり親から再婚家族への変化に着目し，わが国の再婚家族の実態から，その生活問題やニーズを明らかにし，再婚家族支援のあり方について検討する。

以上の目的から，本研究は，①自立困難なひとり親家庭への支援のあり方研究，②再婚家族の実態とその支援のあり方研究という二つの分担研究から構成されている。両分担研

究とも，実態を明らかにし，それぞれの家庭について類型化を試み，その類型ごとの特徴を把握し，ひとり親家庭および再婚家庭の諸問題について，具体的な支援のあり方を示し，家庭支援の実践現場における援助者の資質向上に寄与することを目的としている。

B．研究方法

①自立困難なひとり親家庭への支援のあり方研究

２年計画の初年度の研究方法は，以下の通りである。

１）英国におけるひとり親家庭の当事者組織団体および全英ひとり親家庭連盟，ウエールズ州カーディフ市におけるＤＶ被害者のシェルターを訪問し，資料収集および聞き取り調査を行った。

２）全国の母子生活支援施設の実態調査を実施し，緊急一時保護，就労支援，子育て支援などの支援の実態を把握することに努めた。実態調査から「処遇困難事例」の収集を図り，事例分析をし，課題や特徴等の抽出から，類型化を試みた。

２年計画の最終年度の研究方法，以下の通りである。

１）母子家庭が求める自立支援のための先駆的な取り組みを行っている事業所を，地域に偏りなく全国的に抽出し，各事業所内で母子自立支援に対して中心的な役割を担い，かかわっている担当者を対象に半構造面接を実施した。

２）本構造面接で得られた結果および昨年度全国の母子生活支援施設を対象に実施した質問紙調査から得られた結果に基づき，専門家グループとの協議を重ね，「母子自立支援員マニュアル」の試案を提示した。

②再婚家族の実態とその支援のあり方研究

２年計画の初年度の研究方法は，以下の通りである。

１）再婚家族（ステップファミリー）に関するインタビュー調査研究をおこなった。日本では前例のない未開拓領域のため，半構造化インタビューによって家族生活の多様な領域について情報収集し，探索的な質的データ分析を行った。

２）教育プログラム開発と実施のために，米国再婚家族当事者組織の実践活動についてヒヤリング調査を実施した。それに基づき，再婚家族教育プログラムを翻訳し，日本向けに改訂した。このプログラムを使用したセルフヘルプ活動を実施し，評価検討を行った。

２年計画の最終年度の研究方法，以下の通りである。

新しい家族形態である再婚家族に着目し，再婚家族の支援のあり方について検討するため，①家族観や再婚家族への支援についての専門職へのインタビュー調査，②ステップファミリー当事者へのインタビュー調査，③ステップファミリーへ支援プログラムの開発に取り組んだ。

（倫理面への配慮）

インタビュー調査等においては参加意思の確認を充分に行い，ヒアリング内容や方法などの情報を事前に提供をし，調査員による連絡，訪問など調査の実施及び分析の全過程において，個別ケースが特定されないよう十分に配慮した。また，同様，事例研究においても，プライバシー保護を万全にし，公表時に，個別ケースが特定されないように加工するなど充分な配慮を行った。

C．研究結果

①自立困難なひとり親家庭への支援のあり方研究では，前年度に実施した母子生活支援施設を対象とする全国調査の結果を踏まえ，母子家庭が求める自立支援のための課題を検討し，「母子自立支援員マニュアル」の試案を提示するため，専門家グループとの協議を重ねながら，担当者が活用する「母子自立支援員マニュアル」に記載すべき項目を10項目にわたり設定することができた。その成果については，「母子自立支援員マニュアル」の試案としてとりまとめた。

②再婚家族の実態とその支援のあり方研究では，1）特に再婚家族支援を意識した支援活動が組織化されていないこと，子育て支援や虐待対応の中で多くの相談員が再婚家族のケースを体験していること，2）結婚直後から継母が家族関係上の困難を感じていること，子どもが思春期を迎える時期に関係が難しくなること，思春期以降に継親子間の距離がいった開き，その後に絆が再構築されること，が明らかになった。さらに，3）当事者組織による実証的研究として，対面交流が困難な継母向けにインターネットを用いた対面型サポートグループによる親支援プログラム活動，継母サポートのための通信教育プログラムを研究・開発，実施し，評価を行った。その結果を踏まえ，再婚家族の実態の明確化，社会的認知の拡大，具体的な支援のあり方について提示した。

D．考察

第一に，上記諸種の調査を踏まえ，母子自立支援員のための相談マニュアルについて，その第一次的な試案作成をする作業を完成させたが，これを精緻なものにするには，全国の都道府県市町村に対して同マニュアルの作成の有無，作成の過程等に関する全国調査を実施することと併せて，実際に出来上がったマニュアルの比較検討を行い，より適切な現実に用いられ易いマニュアル作成を行うこととしたい。第二に，ハローワーク等の就労支援に関する情報提供や職業紹介等とのネットワークの構築の実態を明らかにし，母子自立支援員の支援のあり方を検討する。第三に，子どもの利益を前提とし，かつ，当事者の主体性に基づく，職業紹介や就労支援，DV被害者に対する支援（法整備，養育費，離婚調停など），ひとり親の支援をめぐるネットワークの構築などのあり方を検討することとしたい。第四に，「子連れ再婚家族（ステップファミリー）」へのインタビューや，フォーマルおよびインフォーマルな社会的サポートの実態と可能性を探る公的機関の専門職へのインタビューによって明らかになったステップファミリー特有の困難さや支援ニーズおよびステップファミリーの多様な形態による差異，ならびにその実態に応じた対応方法について，さらに詳細な検証・調査を実施していきたい。第五に，本研究が新規に作成した対面型サポートグループによる親支援プログラム活動，継母サポートのための通信教育プログラム等の，ステップファミリー支援プログラムをさらに実践の場で検証・改良する作業を継続していきたい。

E．結論

ある意味で，もろく，弱く，壊れやすく，変化しやすくなってきている家族について，近年，ネットワーク家族と呼称することもあるが，そこでは，家族を閉じたサイクルとして考えるのではなくて，家族と地域の資源を相互に結びつけながら，どのようなサポート

システムを構築するかを問いかけている。地域の中で点になっている家族を横につなげ，当事者としてセルフヘルプやネットワークを構成するということも，今後は十分ありうるものと考える。

わが国の場合，家族に対する思い入れは，深く根ざしたものがある。非婚の家族あるいは再婚の家族における継父・継母の役割と位置，母子家庭の経済的支援の少なさや経済的基盤の脆弱さ，賃金の格差，30 代の子育て期にある女性の常勤就労の難しさ等の問題は，いわゆる女性の貧困化の現象を創出し，そうした家族が貧困への道に落ちていく経過がよく見られる。そのため，いわゆる風土作り，たとえば養育費を父親が支払うということに対する社会的風土作りというように，社会的サービスを構築する前の，社会的基盤作りも大きな課題になる。このような状況のもと，大きな犠牲になったのが，ある意味ではＤＶの家族であったといえよう。従来までは，民事不介入の立場から，家族の問題は家族の中にだけ任せるという自己完結型の対応が迫られていた。これからのソーシャルワークあるいは社会福祉施策は，一人ひとりにとっての家族は永遠のものではなく，いろんな組み換えをしながら存在するものとして捉えることが必要になる。そのため，本人にとって家族はいかなる位置にあるのか，どのようなかかわりが必要なのか，どのような距離にあるのか，等々について，人権意識に立ち，誰も排除されることなく，一人ひとりの自己実現を志向する，あるいは個の単位に立って考えながら社会的なサポートシステムを構築することを課題にすべきと考えたい。

特に，家族が，その人にとって問題の発生要因である場合が少なくない。負の要因を引き継ぎやすい家族の中の世代間踏襲の問題に見られるように，これは，特に乳幼児，児童やひとり親家庭の背景などを分析していくと，そのような側面が顕著に確認できる問題でもある。このようなものを断ち切るには，本人たちの力だけでは不十分でしかない。そこで，社会的なサポートが構築されることにより，家族を再構成したり，あるいは新しいチャンネルを作ったり，新しい風を持ち込むことによって家族を再構成できる実態を，再婚家族やひとり親家族の中から読み取る，学び取ることが本研究の大きな役割の一つ考えている。

新しいステージに入った家族は，一見もろく弱く壊れやすく見えるが，しかし，一人ひとりの幸せ，一人ひとりの個の実現という視点から，家のために，あるいは家族のために差別を受けたり，虐げられたり，家族のために自分を犠牲にしてきた女性たちの歴史（性史）を捉え直すと，あるいは，ジェンダーの視点，フェミニズムの視点に立って再考すると，それぞれが平等で自由に，かつ自己実現を果たせる新しい家族とが構成されることを念頭に置いた政策の導入と，真に意味のある家族政策がそこに登場せざるを得なくなる。したがって，現在は，ある意味で政策的な過度期にあると見てよいであろう。本研究では，それらの実態を十分に捉え，今の状況から家族への具体的な支援策を探り，必要な方法を提示することができたと考えている。

Ｆ．研究発表

１．論文発表

なし。

２．学会発表

①山崎美貴子，北川清一，伊藤恵子「ひとり親家庭の実態と支援方法に関する研究」『日本社会福祉学会第51回全国大会』（四天王寺国際仏教大学），2003年10月
②野沢慎司「ステップファミリーにおけるストレスとサポート(1)：ステップファミリーにおける（継）親のストレスとサポート・ネットワーク」『家族問題研究会定例会』（早稲田大学）2003年1月。
③菊地真理「ステップファミリーにおけるストレスとサポート(2)：継母のストレス経験と役割アイデンティティ形成過程」『家族問題研究会定例会』（早稲田大学）2003年1月。
④菊地真理「ステップファミリーのセルフヘルプグループに関する一考察」『明治学院大学社会学・社会福祉学会2003年度研究発表会』（明治学院大学）2003年11月。

（山崎美貴子）